

としょかんNEWS 第101号



2015年8月7日
湘北短期大学図書館

さぼーち倶楽部、活動報告

● 第10回 ビブリアバトル開催！

さぼーち倶楽部が7月13日に第10回 ビブリアバトルを開催しました。さぼ部7名と図書館職員1名が参加。総勢8名がそれぞれ持ち寄った本を紹介し、参加者全員でディスカッションを行いました。今回のテーマは「マンガビブリアバトル」。マンガのみを対象としたビブリアバトルは初めてでしたが、さまざまなジャンルのマンガが紹介され、盛り上がりました！

第10回 ビブリアバトル「チャンプ本」発表！

- 1位 大今良時『聲の形』(C1)
- 2位 横山キムチ『ねこだらけ』(L1)
- 3位 青色イリコ『ジャポニズム 47—都道府県擬人化マンガ』(E2)



学生選書ツアー第22弾 実施！！

夏季休暇中に図書館の“店頭選書ツアー”を実施しました。8月4日に有隣堂 厚木店にて行われ、学生23名（さぼーち倶楽部8名、一般15名）、教員2名が参加しました。“店頭選書ツアー”とは、図書館の利用者である学生自らが図書館にあったらいいなと思う本、友達にオススメしたい本を、実際に書店の店頭で手にとって選書するという企画。今回の選書ツアーは22回目となり、さまざまなジャンルの本が選ばれました。後期の授業開始日に図書館ミカタのカウンター前とさぼ部コーナーに展示する予定です。お楽しみに！



みなさん、こんにちは。今回は、私が大学生であった頃に読んだ本の中で、特に印象に残っているものについてお話したいと思います。

私が紹介する本は、山崎豊子の、『沈まぬ太陽』です。全部で5巻、2000ページを大きく超える長編です。

1970年～90年の日本航空社(JAL)を舞台とした物語であり、内容を一言で表すならば…何せストーリーが長いので内容沢山なのですが…“企業人が仕事に取り組む姿を通して、『どういう生き方をするか』という事について問いかける”という事だと思っています。

この本の中には二人の主人公がおり、それぞれに対し、人としての正しい行いよりも会社の利益を優先した業務命令が下ります。片方は、会社の利益よりも人としての正しい感性に基づきそれを拒否し、結果として会社の中で左遷をされてしまいます。ですが、本人は自分のした事は人として間違っていないという確信があるので、それを後悔はしません。

もう片方の主人公は、少々の疑問を持ちつつそれらの命令を受け、結果として社内の偉い人達から気に入られ、社内の上昇コースを歩んでいきます。心が晴れやかであるか否かは描かれていませんが、少なくとも自分の地位にはある程度満足をしています。

どちらの生き方が正しいかについては、私には分かりません。そりゃあ誰だって自分の仕事で評価はされたい、けど自分の倫理観を曲げ続けてまではやりたくない…。どちらが正しいのかは、最後は自分のものの考え方、生き方次第なのだと思います。

私が湘北に入職する前の会社でも、こういう事ってありました。きっと学生さんの中でも、こうした経験をされる方がいると思います。それにこのテーマ、会社で働く事だけでなく私生活にも大きく関わりがありますね。こんな場面に出くわした時に、他人がどうこうではなく、自分の考えのもとで自分なりに生き方を選択していく事ができる人間になっていけるといいですね。

【連載】館長閑話(22)「^{かつ}喝！」の張本勲さんの哀しみ

館長 野口 周一

8月には原爆忌がある。小学校用社会科『新しい社会』6年・上には、「日本軍は海外の各地で敗北を重ね、全国の都市が空襲で焼かれて多くの人々が死傷し、さらに、沖縄も占領されました。しかし、政府や軍の指導者は、戦争をやめる決断ができませんでした」「1945年8月6日には広島、9日には長崎に、アメリカ軍は、原子爆弾を落としました。1発の爆弾で、いっしょんにして何万人もの命がうばわれ、まちはふき飛んでしまいました」とある(東京書籍、平成22年検定済)。

さて、TBS系テレビの「サンデー・モーニング」に御意見番として登場し、「喝!」「アップレ!」とスポーツ選手を鼓舞する張本勲さんは、東映(現・日本ハム)、読売、ロッテで活躍し、NBPにおける歴代最高の3085安打を放っている。1962年(昭和37)9月11日、全日本がデトロイト・タイガースを4対0で降した試合を、私はテレビ中継で見た。初回、全日本は張本の先制三塁打、野村克也の本塁打等で4点を奪った。投げては村山実が強打のタイガースを完封。後半、チャンスで張本に打席がまわったとき、張本は敬遠された。その時のバットを高々と構える勇姿が、私の脳裏に鮮やかに焼き付いている。

その張本勲には差別と貧困に喘^{あえ}いだ過去があった。彼は在日韓国人で、右手に障害を持ち、原爆

手帳を持つ身であった(山本徹美『誇り—人間 張本勲』講談社、1995年)。それを順次語って行きたいのであるが、今回は長姉の^{てんこ}点子さんとどめたい。当時、点子さんは広島市第一国民学校の1年生、12歳。勤労働員先で被爆、2日後に担架で運ばれてきたが、全身やけど、家族が顔を見ても本人と分からず、名札で確認したという。「熱いよう、熱いよう」と母の^{ふところ}懐でうめく点子さんに張本さんはブドウを一房もぎ、口元で搾ってあげた。『ありがとう』。消えそうな声が最期だった」「10歳の頃には兄が隠し持っていた、唯一の点子さんの写真も母に焼かれ、愛するわが子を奪われた母の無念さを感じた」、張本さんは「韓国の文化なんですね。お袋は姉の髪の毛一つも残さないんです」と語る(「ヒバクシャ'14秋 千の証言」によせて『毎日新聞』2014年11月18日付)。

昨日6日午前8時、広島の平和記念公園で記念式典が開かれた。子ども代表による「平和への誓い」には、「もう一度、身近な友達、世代の違う人々、さまざまな国や地域に住む人々と、平和について共に考えてみませんか」「広島に育つ私たちは、/事実を/被爆者の思いや願いを/過去 現在 未来へと/私たちの平和への思いとともにつないでいく一人となることを誓います」とあった。